論　文

倫理的道徳的目的としての「朗らかさ」に関する考察
－「教育」と人格変容を巡って－

○後藤　淳*1　吉村　高男*2

キーワード：朗らかさ、努力、エートス、魂、人格変容

1.　はじめに

明朗であるという性格は、ひとつの美徳として数えられるものであろう。それはおそらく人間関係を潤滑にするに役立つものであるとも考えられるであろう。朗らかな人たらんとする願望と、かの人を羨ましく思う感情が自らの中に密かに存することに気付いた経験を多くの人間が持つことであろう。

本稿では、先ず、デモクリトスが説く原子論的自然観の中に位置を占める人間が、生得的であるとされた本来的「善」の顕現としての「朗らかさ（εὐθυμίη）」、すなわち、倫理的道徳的「よさ」を獲得実現するための「努力・修練（πόνος）」について考察する。次に、デモクリトスの説く「朗らかさ」を目的とする人間の生き方が、原子論的自然観の中で果たして可能であるか、言い換えれば、原子の必然的機械的運動を原理とする図式の中に、「善」を目指すという意図的な人間の生が許容されるのかについて論ずる。そして最後に、デモクリトスの「朗らかさ」論を前にした現代のわれわれの想い、あるいは、彼の立論の現代教育への適用可能性について考えてみたい。

本文並びに註において使用する断片番号はすべて、H. Diels u. W. Kranz, *Die Fragmente der Vorsokratiker*, Weidmann, 1974, 17Aufl,.（以下，DK と略す）によるものとする。

2.　原子論の中の人間

2-1.　人間の「エートス（ἦθος）」

古代原子論においては、「不可分なるもの（つまり、原子）」自体の形態とその配列と位置における相違が、事物の多様性を説明するための唯一の方法であるとする自然学的世界観の中に、人間も当然包摂されている。デモクリトス断片中に多くを占める倫理学的内容を持つものの分析を通して「朗らかさ（εὐθυμίη）」を考察するために、その端緒を彼の語る人間の「よさ」から始めたい。

断片 57.　κτηνεών μὲν εὐγένεια ἡ τοῦ σκήνεος εὐσθένεια, ἀνθρώπων δὲ ἡ τοῦ ἤθεος εὐτροπίη.

動物の優秀さは体躯の強靭さに、一方、人間のそれはエートスの善良さによる。

デモクリトスも、人間と動物たちとの差異を論ずる。この断片において語られる動物と人間との対比は、動物：人間＝身体の強靭さ：エートスのよさ、である。「身体（σκήνος）」という用語自体は、魂が仮に宿る場所としての意味を有するものである以上、両者の生得的特質（εὐγένεια = εὐ + γένος よき種）を、それぞれ外的なものと内的なものとに、換言すれば、感覚的なものと非感覚的なものとに見る伝統的な視点に立ったものであると言えるであろう。さらに、「強靭さ（εὐσθένεια）」と「善良さ（εὐτροπίη）」との対比から、人間の生得的特質が強弱により語られるものではないとデモクリトスが考えていたということを窺うことができる[註1]。

数多く残されたデモクリトスの倫理的内容を持つとされる断片にあって、彼の人間に関する倫理観の端緒にこのような視点を確認した上で、最高到達状態とし

*1　東亜大学　人間科学部
*2　山口福祉文化大学　ライフデザイン学部

ての「朗らかさ」を考察すべきであると考える。彼は、人間の「エートス」そのものについてどのように論じているのであろうか。

断片 56. τὰ χαλὰ γνωρίζουσι καὶ ζηλοῦσιν οἱ εὐφυέες πρὸς αὐτά.

美しきもの（pl.）に対して生まれつき適した人々は、それらを知りかつ探求する。

断片 184. φαύλων ὁμιλί η συνεχὴς ἕξιν κακίης συνάυξει.

悪しき者と継続的に交われば、悪い状態を強める。

断片 192. ἔστι ῥάιδιον μὲν ἐπαινεῖν ἃ μὴ χρὴ καὶ ψέγειν, ἑκάστερον δὲ πονηροῦ τινος ἤθους.

褒めてはならぬことを（褒めたり）、叱ってはならぬことを（叱ったり）することは容易である。しかるに、いずれにしても、一種の賤しきエートスのあらわれである。

上の三断片からは、デモクリトスが「エートス」に貴賤の別を見ていたことを窺うことができるであろう。断片 56 では、「エートス」という用語自体は使われていないものの、εὐφυέες <εὐφύες という形容詞が持つ生得的気質－天賦としてある事項に相応しい能力を持つ－に限定した人間が、知り求める対象を美－それは同時に、真でも正でもある－とする、と述べられている。すべての人間が、美しきよきことを求めるわけではない、という一種の制約をデモクリトスが認めていたといえるであろう。このような留保、あるいは限定的認可は、人間の「エートス」の有様が後天的に変質形成されうるということを含意したものであるといえるかもしれない。断片 184 や 192 に残された卑近ともいえるであろう彼の叙述の中に、その一端を垣間見ることができるであろう。

先ず、断片 184 では、「朱に交われば赤くなる」ことが、心的状態である ἕξις の悪化という表現によって語られる。この断片のみでは、「悪しき者」の具体的「悪性」についての言及が欠けているため、それは確定できないものの、品性を毀損するさまざまな悪行を意味すると推測できるであろう。この断片において重要な点は、「赤くなる」ことが ἕξις の悪化に他ならないということである。外界との接触により変化する心的状態が、「似たものは似たものにより（ὅμοιος ὁμοίως）」影響を最も強く受ける以上、悪しき事柄との接触が長期に亘ることによって，ἕξις の劣化が一層促進して止まぬことであると容易に肯けるであろう。

このような ἕξις を悪化させる具体的一例が、断片 192 において挙げられている。対句的表現をとりながら提示された二つの事例は、共に本来的方向性に逆行するものである。褒めても、あるいは叱ってもならぬことを却って行うこと自体は、端的に断片 184 における「悪しきこと」なのであり、それらが ἕξις の劣化に導くことは明らかである。加えて、断片 192 においては、それらが「容易である（ῥάιδιον）」と形容されている。人間が陥る無反省日常の安逸さを述べると共に、それを「賤しきエートス（πονηροῦ ἤθους）」であるとデモクリトスは痛烈に非難するのである。

さて、ここで断片 56 に立ち返りたい。すなわち、生得的に美しきものに向かうことのできる人も、内的堕落の可能性を持つとデモクリトスが見做していたと考えるべきであろうか。直接的にその可否に言及する断片は残されていないものの、上に挙げた断片 184 や 192 を手掛かりとするならば、生得的な優秀さすらも何らの変容を蒙ることなく保持されるものではないと彼が考えていたと推測できるであろう。この問題については、彼の原子論による世界図式と相俟って、ネガティブな推論に立たざるを得ないと考える。後述するように、そうであるからこそ、彼が倫理的道徳的目標としての「朗らかさ」と、それを実現するための人間による主体的努力の重要性を説いたと考えられるのである。

次節を論ずる前に、引用断片に見られるデモクリトスの人間観について簡単に纏めておきたい。

1. 他の動物とは異なり、人間の優秀さは「エートス」が担う。
2. しかし、すべての人間が本来的に美しきものを志向するわけではない。
3. 優れた「エートス」すらも毀損可能性を持つと考えられ、加えて、その劣化を誘う状況は日常的に卑近なものである。

2-2. ピュシスを作る

人間の「エートス」が悪への変容可能性を持つということは、それが同時に善へ向かう可能性も持つことに他ならない。デモクリトスは、否定的ともいえる人間観を述べると共に、善への人間的志向性についても語っている。

断片 33. ἡ φύσις καὶ ἡ διδαχὴ παραπλήσίον ἐστι. καὶ γὰρ ἡ διδαχὴ μεταρυσμοῖ τὸν ἄνθρωπον, μεταρυσροῦσα δὲ φυσιοποιεῖ.

ピュシスと教えることは、ほとんど類似している。というのも、教えることは人間（sgl.）を変え、しかるに変えることによりピュシスを作るからである。

この断片における「ピュシス（φύσις）」という用語は、すでにデモクリトスの時代にあっては、本来の「自然」という意味に加えて、「本性・性質」という意味を獲得していることを念頭に置かねばならない[註2]。この両義に応じて断片を解釈するならば、以下の二通りの解釈が可能となるであろう。

第一に、「ピュシス」を「自然」と解するならば、「ピュシス」全体の構成要素である原子の配列と位置関係が変化するということが「変わる」ということである。このことはすなわち、現象している事物の刻々の多様性を保持するものである。第二に、「ピュシス」を「本性」と解するならば、変化により事物の属性が変質するということである。この点で、「ピュシス」は「エートス」とほとんど同義の用語と見做しうることになる。

しかし、この断片がわれわれに与える意外性は、「ピュシス」と「教えること・教育」が並置されていることであろう。γὰρ 以下に与えられた並置根拠の前半部では、教育が一人の人間を変えるとされ、後半部では、そのことにより「自然」であれ「本性」であれ、両義的意味において従前のものとは異なる「ピュシスが作られる」と述べられる。この限りでは、この断片は「教育」の役割と意義について叙述したものであると考えられる。すなわち、前節で論じたように、善悪双方向への変質契機としての「教育」に言及したものであると考えられる。デモクリトスの時代を考えてみるならば、すでにソフィストたちによる一種の教育活動はアテナイを中心として活発に展開されており、アテナイを訪れた経験を持つデモクリトスが[註3]、そのような状況から何らかの示唆を受けていたとも推論できるかもしれない。しかし、単なる推論に留まらず、この断片の語る「教育」の重要性というデモクリトスの主張をより細かく検討してみたい。

筆者が着目する第一点は、「教育」によるピュシス変容の対象である人間が単数形（τὸν ἄνθρωπον）で用いられていることである。それは、人間全体への「教育」の効果という観点ではなく、個人としての人間への関係において「教育」が捉えられているということである。教授形態は多岐に亘るものであるにしても、あなたに向かっているという教授側の姿勢と、私が薫陶されているという被教授側双方の不変なる対峙関係についてデモクリトスが述べたものであると考える。

更に着目したい第二点は、「変化することにより」始めて「ピュシス」創造が達成されることである。変化を惹起させる要因は、内的なものと外的なものの二通りが想定されるものの、原子論の図式内で考える限りでは、「教育」は外的要因、すなわち、刺激の一種と見做すことができるであろう。「教育」が、あくまで適切な刺激要因として作用する場合に、個人の「ピュシス」変化が結果するのである。

このように断片を解釈するならば、その主張はある意味で平板なものであり、常識的議論に過ぎないとさ

れるかもしれない。しかし、この断片中における「ピュシスを作る（φυσιοποιεῖ）」という動詞が、デモクリトスの新造語であるという従来の研究を受け入れるならば[註4]、事物の「本性」すらも可変的であると見做すダイナミズムを、この動詞の中に見なければならないであろう。それでは、「教育」はどのような方法によって人間の「ピュシスを作る」のであろうか。言い換えれば、「教育」が人間の「ピュシス」「エートス」に与える刺激はどのようなものなのであろうか。

3. φυσιοποιέω としての πόνος

3-1. 苦しみや辛さを打破する「努力（πόνος）」

断片 240. οἱ ἑκούσιοι πόνοι τὴν τῶν ἀκουσίον ὑπομονὴν ἐλαφροτέρον παρασκευάζουσι.

積極的努力（pl.）は、消極的なそれらに耐えることを、はるかに容易なものとする。

断片 241. πόνος συνεχὴς ἐλαφρότερος ἑαυτοῦ συνηθείηι γίνεται.

継続的努力(sgl.)ですらも、慣れれば容易なものである。

断片 243. τῆς ἡσυχίης πάντες οἱ πόνοι ἡδίνες, ὅταν ὧν εἵνεκεν πονέουσι τυγχάνωσιν ἢ εἰδέωσι κύρσοντες. ἐν δὲ ἑκάστῃ ἀποτυχίη τὸ πονεῖν (?) ὁμοίως ἀ νιηρὸν καὶ παλαίαπωρον.

すべての努力(pl.)は、目標を捉えていたり、あるいは到達できることを知っていれば休息よりも楽しい。しかし、失敗においては、努力すること（?）は、同様に辛くて煩わしい。

デモクリトスが「ピュシスを作る」ための変化作用因として語るものは「努力（πόνος）」である。前章を踏まえるならば、「教育」的方法論としての「努力」として位置づくのであろうか。上に挙げた断片中で、「努力」という名詞に冠せられた形容詞を取り出してみれば、「積極的（ἑκούσιοι）」（断片 240）「継続的（συνεχὴς）」（断片 241）であり[註5]、「すべての（πάντες）」（断片 243）ですらある。各断片には、比較対照される別状態の「努力」や、条件が付加されることにより、語義的には本来疎まれるであろう「努力」が肯定的に捉えられている。断片 241 における「継続的」という形容詞は、1-1 に引用した断片 184 においても、否定的文脈においてではあるが、用いられていた。この点を付加した上で形容詞使用と付帯条件を纏めてみるならば、デモクリトスの述べる「努力」は、与えられた刺激－「教えられる」ということ－に対して肯定的に反応することを契機として、目標や成果への到達可能性を確認することによって実践されるものであるといえるであろう。

この場合、「努力」を行う側、つまり、教授される側の個人においては何が生起するのであろうか。刺激として与えられる「教育」－それは個人を構成する諸原子に対する外部からの原子衝突に他ならない－によって、個人を保っている原子間の配列と順序に変動が生じ、その結果として、それ以前の全体としての性状が変質することであると考えざるをえない[註6]。原子相互の衝突による分離と新たな結合の結果として、二義的に諸事物の性質を説く原子論的図式の中にあっては、このように考えざるをえないのである。いわゆる目的論的議論を行うことが困難であると考えざるをえない原子論において、「積極的」であり「目標を見据えた」「努力」という主体的で意識的営為の説明が果たして可能であるのだろうか。この疑問に関しては後述することとして、デモクリトスの立論を追いたい。

3-2. 「努力（πόνος）」吟味

倫理的内容を語るものとして分類される諸断片中に、「目的を見据えた努力」を具体的に述べていると思われるものが存する。

断片 211.σωφροσύνη τὰ τερπνὰ ἀέξει καὶ ἡδονὴ ἐπιμείζονα ποιεῖ.

思慮は喜ばしきこと(pl.)を増し、快楽をより大きなものとなす。

断片 231.εὐγνώμων ὁ μὴ λυπεόμενος ἐφ᾽ οἷσιν οὐκ ἔχει, ἀλλὰ χαίρων ἐφ᾽ οἷσιν ἔχει.

思慮分別ある人とは、持たぬもので心を痛めず、却って持てるもので喜ぶ人である。

これら二つの断片からは、「努力」の達成点を見通すための「快楽」の意味と、自制し自足することの前提として「思慮（σωφροσύνη = σω + φρονεῖν　健全に思慮すること）」「思慮分別（εὐγνώμων = εὐ + γνώμη よく知恵を持つこと）」を読み取ることができる。すでに、デモクリトスに先行する思想家においても、「思慮」への言及は存する[註7]。特に、認識論あるいは知識論の領域にあって、何を知ろうと欲するのか、さらにどのように知ろうとするのか、そして、獲得した内容が知たりうるのかの吟味を総括的に担う人間の心的能力として、「思慮」は高い位置付けを受ける概念である。上の二断片は、このような「思慮」が「努力」の向かう目標認知に不可欠であることを述べるものであるだろう。

デモクリトスは、「思慮」への肯定的言及と同時に、その対立概念である「無思慮」あるいは「分別を欠くこと」についても語る。

断片 233. εἴ τις ὑπερβάλλοι τὸ μέτρον, τὰ ἐπιτερπέστατα ἀτερπέστατα ἄν γίγνοιτο.

もし人が度を過ぎれば、最も喜ばしきこと(pl.)を、最も喜ばしくないこと(pl.)となすであろう。

慮りを欠くこと、すなわち、分かつべき割合（τὸ μέτρον [註8]）を踏み越える結果は、喜びの破壊である。最上級の使用は、まさに強意に他ならない。上に引用した断片 211 における τὰ τερπνὰ < τὸ τερπνός と、この断片における τὰ ἐπιτερπέστατα < τὸ ἐπι + τερπές + τατος、さらに(τὰ) ἀτερπέστατα < (τὸ) ἀ + τερπές + τατος を並置してみるならば、主語としての「思慮」と「度を過ぎること」の対比は、一層明確となるであろう。「努力」は盲進でも猛進でもなく、自らが「持てるもの（οἷσιν ἔχει）」－それは、物質的意味に留まらず、能力といった心的意味も含意してるであろう－への「自足（αὐτάρχεια）」に立った堅実なるものでなければならない。しかし、人間の「エートス」は、既に見たように、常に善悪双方向へと揺れる可能性を、敢えて言えば、堕する可能性を多く持つものであった。デモクリトスは、「エートス」を毀損し規矩を踏み越えさせる動因として「快楽（ἡδονη）」を考えていたと思われる[註9]。

断片 69. ἀνθρώποις πᾶσι τωὐτὸν ἀγαθὸν καὶ ἀληθὲς. ἡδὺ δὲ ἄλλωι ἄλλο.

すべての人間（pl.）にとって、善と真は同じである。しかるに、快楽は各人にとって別である。

この断片は、人間全体にとっての最高価値である「善・真」の同一性、共通性と、「快楽」の個別性を対立的に語る。断片 211 において、「快楽」自体が「思慮」により増大するものであることが了解されていることからするならば、この断片におけるそれは、「思慮」に基づかぬ「度を過ぎ超えた」個的特殊な形態をとるという点で、「善・真」と対置されていることになる。個人が実行する「努力」の方向が、他の個人のそれと同一あるいは共通である場合には、「努力」の継続自体が快であり、到達する状態が「善・真」すなわち「幸福」であり、それは最大の快に他ならないことになるであろう。人間の「エートス」を峻別し（断片 56）、さらに悪化への志向性を認めるとき、デモクリトスが個的「快楽」に警鐘を鳴らすことは当然のことである。

さらに「快」を巡っては、大人と青年や子どもとを区分する彼の叙述が存する。

断片 70. παιδός, οὐκ ἀνδρὸς τὸ ἀμέτρως ἐπιθυμεῖν.

度もなく欲することは、子ども（の仕儀）であり、大人（の仕儀）ではない。

断片 294.ἰσχὺς καὶ εὐμορφίη νεότητος ἀγαθά,
γήραος δὲ σωφροσύνη ἄνθος.

力強さと美しき姿は若さの善である。それに対して、老いの気品は思慮である。

断片 295.ὁ γέρων νέος ἐγένετο, ὁ δὲ νέος ἄδηλον εἴ ἐς γῆρας ἀφίξεται. τὸ τέλειον οὖν ἀγαθὸν τοῦ μέλλοντος ἔτι καὶ ἀδήλου κρέσσον.

老人は若くあった。しかし、若者は老いに到達するかどうか不明瞭である。さて、完成した善は、将来のそして不明瞭なそれよりも優れている。

これらの断片については、内容検討はもちろんであるが、使用されている用語に注目したい。先ず、断片 70 における ἀμέτρως という副詞は、ἀ + μέτρον であり、「度なき状態で」とは「無思慮」に他ならない。断片 294 においては、「思慮（σωφροσύνη）」がそのまま用いられており、断片 295 における「完成した善（τὸ τέλειον ἀγαθὸν）」とは、「継続的努力」の目標が「終わりに達した（τέλειον = τὸ τέλος）」状態である「善」あるいは先の断片 69 における「善・真」を想起させる。全体として受ける印象としては、平易な文体を基礎にして、同一用語の反復的使用や全否定の接頭語を冠した名詞や形容詞の配置、さらに接頭語 εὐ を持つ名詞の多用、対句法といった修辞技法を加味することによって、デモクリトスが自らの倫理的道徳的主張を展開したと考えてもよいであろう。

さて、断片の内容検討に移ろう。三断片共に、年長なる人間のほうが年少なる者よりも優れているという主張であり、その根拠は断片 295 に述べられる。それは、先に、子どもは「分別を弁える」ことに適わず（断片 70）、若さの善さは外的形姿に過ぎない（断片 294）と語った上で、成長すれば「度を過ぎぬこと」を知り、「思慮」を身に纏うことが必ずしも保証されないからである。「老いに達するかどうか不明瞭（ἄδηλον εἴ ἐς γῆρας ἀφίξεται）」であるとは、成長の不確実性と死の唐突さを含意していると思われるが、このことはすなわち、原子結合の解体が外的刺激により生ずるために、その予測などできないということに他ならないであろう。「完成した善」とは、経験的に想定される原子結合の限界点－つまり、死－まで、個体としての存在を継続できたということであるかもしれない。

さらに、デモクリトスの対句表現に立ち返って、彼の言う人間の「エートス」を再確認したい。1-1 に引用した断片 57 においては、動物：人間＝体躯の強靭さ：エートスの善良さ、という類比が完成した。この比は、断片 294 においては、若さ：老い＝美しき姿：気品としての思慮、と置き換えられ、さらに断片 70 においては、子ども：大人＝度なき欲望：（度を弁えること＝分別を持つこと）と同意となる。このような類比により人間を他から峻別し、さらに人間を細分化した結果として特定の人間の有様を最高のものとする叙述は、デモクリトスに特徴的であるのではない[註10]。理解するに容易であり印象に残りやすいこの表現形式に準拠した上で、現実に存在する人間の中で、加齢を糧として結実した「思慮を持つ人間」を、デモクリトスがその最高位に置いたと考えてよいだろう。このことは、「エートス」に対して与えられる「教育」の主体として、年長なるものの適性を説いているとも推測できるであろう。

それでは、「思慮を持つ人間」の「エートス」はどのような状態にあるのだろうか。これまでの議論を踏まえるならば、それは個人的「快」から離れたものであること、さらに人間全体にとって「善・真」であることを同時に満足するものであろう。またそれは、「教えること」を担う者が実現を終え、これから教えられる者が到達を目指す最高目的に他ならない。デモクリトスは、これを身体的強さや姿形の美を拒否した心的状態である「朗らかさ（εὐθυμίη）」であるとする。

4.　「朗らかさ（εὐθυμίη）」と，その実現を担う「魂（ψυχή）」

4-1. 「朗らかさ（εὐθυμίη）」

デモクリトスの学説について報告する中で、ディオゲネス・ラエルティウスは「人間の行為の目的は朗らかさである。…それは、快楽と同一のものではなく、恐怖や迷信その他の感情に悩まされずに、魂が穏やかに平静に時間を過ごす状態である。（デモクリトスは）これを幸福（εὐεστώ）とも呼んでいる」と述べた [1)]。この文章からは、後代の学説誌家が、デモクリトスの倫理的道徳的目的として「朗らかさ」を認知していたことを窺うことができる[註11]。ディオゲネス・ラエルティウスによれば、それは「魂が穏やかに平静に時間を過ごす状態」と意訳されているが、以下でデモクリトスの断片中に直接確認する。

断片 191. ἀνθρώποισι γὰρ εὐθυμίη γίνεται
μετριότητι τέρψιος καὶ βίου συμμετρίηι.
τὰ δ᾽ ἐλλείποντα καὶ ὑπερβάλλοντα
μεταπίπτειν τε φιλεῖ καὶ μεγάλας
κινήσιας ἐμποιεῖν τῆι ψυχῆι. …

というのも、人間（pl.）にとって朗らかさは喜びの適度さと生の適切さによって生ずる。しかるに、不足と過多は、変化することで魂（pl.）に大きな運動を引き起こすからである。（後略）

断片から読み取るならば、デモクリトスの言う「朗らかさ」は、現代のわれわれが思い浮かべるような活動的で積極的であること一辺倒ではなさそうである。このことは、「喜びの適度さ（μετριότητι τέρψιος）」と「生の適切さ（βίου συμμετρίηι）」から生ずると述べられており、出自とされる二つの用語が共に「μετριότης < μέτρον 測定されたもの＝割合に適ったもの＝バランス」という言葉の同義派生語であることから確認できる。これは、ディオゲネス・ラエルティウスが「…悩まされずに…平静に時間を過ごす状態である」と伝えた内容とも一致する。

さて、最高目的が「朗らかさ」という言葉により述べられる一方で、デモクリトスの諸断片中には「幸福（εὐδαιμονίη）」という用語も散見される。筆者は、εὐθυμίη と εὐδαιμονίη がそれぞれ担う倫理学的定義について未だ厳密に議論するに到ってはいないものの、後者が前者の必須前庭である平衡性を損なわせる「快」に関する諸断片－「幸福」が「快」の否定であるとする内容を持つもの－の中に用いられる傾向に着目する。

断片 40. οὔτε σώμασιν οὔτε χρήμασιν
εὐδαιμονοῦσιν ἄνθρωποι, ἀλλ᾽
ὀρθοσύνηι καὶ πολυφροσύνηι.

人間（pl.）は、身体によっても金銭によっても幸福なのではなく、正しさと思慮の広さ[註12]によって（幸福なのである）。

断片 171. εὐδαιμονίη οὐκ ἐν βοσκήμασιν οἰκεῖ
οὐδὲ ἐν χρυσῶι. ψυχή οἰκητήριον
δαίμονος.

幸福は、肥太った家畜の中にも黄金の中にも存しない。魂は、ダイモーンの住まうに相応しい。

これら二断片に示された「身体」「金銭」「家畜」「黄金」という事例は、その所有が幸福状態ではないとされる。根拠が説明されているわけではないが、それらがすべて量的に－強度や多少ということ－測定されうるものであることから、その否定理由は断片 191 にある「不足と過多に変化する」ということであると考えられる。少ないにしても多いにしても、いずれかの状態認識に拘泥した途端に「適度さ」を欠くこととなり、それはすなわち、「幸福」あるいは「朗らかさ」から離れた心的状態に堕することになるということであるだろう[註13]。このことは、断片 40 における「思慮の広さ（πολυφροσύνηι）」が対立概念として考えられることからも確認できる。

さて、静的ともいえるデモクリトスの「朗らかさ」は、自らの外なる物的事象によるさまざまな程度の異なる刺激に対する反応を、できるだけ平静に保つことなのであろうか。「度を過ぎず」といい「継続的」と冠された「朗らかさ」を目的とする「努力」－それは、

「思慮」を実質的内容としていたーを引き受ける人間の「魂（ψυχή）」に関するデモクリトスの断片を考察せねばならない。それは、断片 40 における σῶμα と断片 171 における ψυχή との対比や、そもそも「エートス」の議論は人間の内面に関するものであること、さらに、

断片 170. εὐδαιμονίη ψυχῆς καὶ κακοδαιμονίη.

魂の幸福と（魂の）不幸。

（別訳：幸福と不幸は共に魂に属する）

からなされる必然的要請である。

4-2.　原子論における人間の「魂（ψυχή）」

デモクリトスの魂論を検討する場合の最大の困難は、原子の必然的運動によるとしか説かれていない自然観世界観の中で、人間の「魂」に果たして主体的目的意識、言い換えれば、特定の価値への志向性といったものを認めることが可能であるか、ということである。筆者は、それに対して懐疑的立場に留まらざるを得ないと考えていることを予め述べた上で、以下の考察を進めることにする[註14]。

アリストテレスは、「デモクリトスは魂が一種の火であり熱いものであると述べている。すなわち、「不可分なるもの（つまり、原子）」は形態において無限に存するものの、それらの中で球形のものが火であり魂であるといっている」と述べ[2)]、さらに、その理由について「球状のものが魂であるとは、あらゆるものにとって、そのような形態のものが最もよく入り込むことができ、自ら動き他を動かすことができるからである」と続けている[3)]。出典である『霊魂論（*De Anima*）』の引用箇所が、人間の感覚能力分析を行った上で、第三巻におけるいわゆる魂の二部分ー受動理性と能動理性ーへ進むための先行者批判という位置を占めることを考えるならば、アリストテレスが人間の「魂」に認めた能動性という観点に、すでに力点が置かれていることは理解できる。また、丸い最も微小なる不可分なるものは、身体の他を構成する他の不可分なるものよりも優れているという原子論における大前提を了解するならば、そのように優れた「魂」に、二義的には目的論的志向性が許容されるかもしれない。

そこで、アリストテレスの言う「自ら動き他を動かすことができる」能力が、球状の火的原子には本来的に付帯するという限りでは、これまでの議論を、「教育」は人間の「魂」のあり方、つまり「エートス」を「思慮深き」ものたらしめる方向への「努力」を年長者が促す作業である、と纏めることができることになる。実現すべき最高状態である「朗らかさ」が、落ち着いた静的な状態を意味するという、現代のわれわれの語感からするならば、一種奇妙なものではあるにしてもである。

しかし、デモクリトス自身は、人間の「魂」が作用因たりえるとは述べていない。原子（不可分なるもの）が運動する原因は機械論的「必然（ἀνάγκη）」であり[註15]、仮に「魂」が他を動かすことがあるにしても、その作用的運動は二義的で二次的なものでしかないであろう。プラトンやアリストテレスに到る古代ギリシア人が、火的元素（πῦρ あるいは αἰθήρ）の中に最も優れた運動性を認めていたことは間違いない。さらに、自然学的認識の中では、天体の燃焼を火的元素により説明したことも事実である。しかし、そうであるからといって、デモクリトスの倫理学の要諦であるだろう「魂」のあり方を論ずるに際して、こと原子に一義的な能動性を認可することについては逡巡せざるを得ない。現時点では、人間の「魂」を構成する原子の塊が、経年の中で受動した多様な刺激のうちから最も好都合な配列と順序を結果させるものを選択保持し、次に、それと同様の結果を他の人間に生起させるべく刺激することが、デモクリトスの言う「教育」であると考えざるを得ない。言い換えれば、快適であるという原子配列ーそれは、一個の球状原子からなる集合体としてのより大きな球状の「魂」ーが、乱されることなく保ち続けられることを「朗らかさ」という概念によって目的化する「教育」であるということである。それは、「今ないた鴉がもう笑った」と言われるが如く、球状

であるがゆえに、その一個一個の配列を簡単に変えてしまう－配列の変化により従前の感情が急激に変わることが、泣き笑いの転換の原因として説明される－人間の「魂」への刺激反応を「教えること」であるともいえるであろう。

5. デモクリトスの「朗らかさ」と現代のわれわれ

最初に記した如く、「朗らかである」と形容される人格については、われわれの誰もがそれを忌避しないであろう。実際、内省的であるとか陰湿であるといった人格が理由もなく疎まれ、集団である家族・学校・社会の中に具体的な問題が顕在化している。紀元前四世紀にデモクリトスが展開した「朗らかさ」という概念は、しかし静謐なものであり、自らの「快」が「度を失せぬ」ようにあるための慮りに裏打ちされたものであった。言葉の意味内容の異同を別にしても、われわれは彼の言う「朗らかさ」に対してどのように対峙すべきであろうか。「魂」論を巡る根本的疑問の解決には到っていないものの、この点について最後に考えておきたい。

デモクリトスが語る「教育」が「努力」を求めるものであるということは、人格の変容という問題として捉えることができるであろう。心理学的議論からするならば、人間が人格変容を惹起する原因は二つあるとされる。ひとつは、かくあらんとする主体的動機付けであり、もうひとつは、目前の困難に対して無意識的にであっても取り組む実践性－この場合には、変容は困難克服後の結果として生起するとされる－である。前者は、望ましきものであると措定した方向への自覚的変容であり、それに対して後者は、ある意味では、意図せぬままに惹起するといえるかもしれない[註16]。

デモクリトスが「努力」に冠した形容詞や付帯条件を思い出してみるならば、彼の説く「努力」は、より前者の意味に近いものであるだろう。この場合には、教育が行う倫理的道徳的動機付けが有効であることになる。さらに付言するならば、その動機付け自体が、正しき教育者によって正しき方法論によりなされることを必須の前提とすることは、言を俟たないであろう。そして、仮に正しき方法論により与えられる「教育」が、それを受取る者にとって困難なものである場合であっても、彼がそれを克服受容できた時に、人格変容は達成されることになるとも考えられる。前者が刺激に対する肯定的な連続反応と見做しうるのに対して、後者はより一層、「教育」する側に、それを受取る側の「度」を見抜く慧眼が求められることになるであろう。教育者の資質に求められる責任と、被教授者が「努力」を引き受ける準備が整っていることの同時性－筆者は、この同時性を教育における「同啄性」と考える－が、人格変容を実現するための重要な要因であるだろう。

「朗らかさ」であれ「幸福」であれ、人が何らかの倫理的道徳的最終目的を志向しながら生きる時、「思慮深く」あることが求められるわけである。本論を閉じるに際して、もうひとつデモクリトスの断片を置くことにする。

断片 264.…, εἰ μέλλει μηδεὶς εἰδησειν ἢ οἱ πάντες ἄνθρωποι. ἄλλ' ἑωυτὸν μάλιστα αἰδεῖσθαι.…

（前略）仮に、誰一人として知らず、あるいは、万人が知ろうとも、（人は）自分自身を最も恥じるべきである。（後略）

［註］

註 1　純粋な原子論的説明によって、このような対比（logismos）が成立しうるかどうかに関しては疑問が残る。しかし、実際に、彼が多くの道徳的倫理的生活について語る断片の中では、対比的分析という視点は許容されると考える。
Th, Cole. ; *Democritus and the Sources of Greek Anthropology*、American Philological Association、1990、p.118. n.31

註 2　エンペドクレス断片 31。（DK.. 31 B 110, 5.）
プラトン；法律 410e

註 3　D.L. IX, 36.　この箇所では、デモクリトスがソクラテスを見知っていたことにも言及されていることからも、彼がソフィストたちの活動やその影響について、直接経験を持ちえたと考えられるのである。

註 4　Liddle & Scott においても、本断片のみが出典引用として例示されるのみである。
西川　亮；デモクリトス研究、理想社、1971、p.254

註 5　ἑκούσιοι という形容詞は、ἀκουσίοι と対句的に用いられる。ピュタゴラス断片 5 では、これらが「学習（μαθήσεις）」に冠せられている。
συνεχὴς は、例えば、パルメニデス断片 8 において「一なるもの（ἕν）」を修飾している。

註 6　cf., C.C.W.Taylor；*The Atomists: Leucippus and Democritus*、Toronto、1999、p.233

註 7　DK. 22. B 112. 116.
DK. 87. B 49. 58.

註 8　μέτρον という語は、本来、測定された量（長さ等）を意味すると共に、割合や定量性を含意する用語である。
ヘラクレイトス断片 30 やクリティアス断片 6 では、自然学的意味（「一定の割合分の量」「適量性」）において用いられている。

註 9　この語は hedonism の語源である。人間がひとつの規矩を越える、あるいは無視するに至る心的要因である。さらに、この語は、引用した断片 211 以外にも、断片 178，189，207，214，235，262，293 にもみられる。ἡδονη の多用は、「快楽」への嫌悪やその忌避が、道徳的目的を達成するために不可欠であるとデモクリトスが考えていたことの証左と見做すことができるであろう。また、この用語が、ほとんどの場合には否定的文脈で使用されているものの、断片 207 や 214 における肯定的使用は、デモクリトスの倫理観の特徴であると考えていいかもしれない。

註 10　クセノファネス断片 15、16。
ヘラクレイトス断片 4、5、9、13、14、29、49、83、104、117。

註 11　Stobaeus、II 7, 3i（DK 68 A167.）
Cicero、*de fi,*、v 8, 23（DK 68 A169.）

註 12　「思慮の広さ」と訳出した πολυφροσύνηι は、接頭辞 πολυ が持つ「量的多」というニュアンスを、「広さ」と訳した。語義に忠実であるならば、「多く思いを巡らせること」であろう。
ホメロスには接頭辞 πολυ を持つ名詞が多用されているものの、時代が下がるにつれて「量的多」から「質的深さ」へと人間の価値が変化することを指摘したスネルの研究からするならば、デモクリトスが πολυφροσύνηι を用いていることには興味を引かれる。B.Snell；*Die Entdeckung des Geistes. Studien zur Entstehung des europäischen Denkens bei den Griechen*、Göttingen.、1980、5Aufl、pp.25-29

註 13　テイラーは、倫理的目的である「朗らかさ」に到達する方法について二つを挙げている。ひとつは、悪い快楽と有益な快楽との峻別であり、もうひとつは、習慣的道徳の遵守である。
Taylor；*ibid*、p.227
またレーベルは、デモクリトスが個人の道徳的自律を強調し、個人的な道徳的メカニズムに覚醒することを力説したと論ずる。R.Löbl；*Demokrit. Text zu seiner Philosophie*、Amsterdam、1989、p.86

註 14　デモクリトスの原子論中に倫理学を位置付けることに関しては、未だ確定された議論はない。多くの研究者たちも、いわば、それ自体の判断を留保したままで、彼の倫理的断片を論じている。
J.Warren；*Presocratics*、Acumen、2007、pp.171-173
U.Hirsch；War Demokrits Weltbild mechanistisch und antiteleologisch?、*Phronesis*、35，1990、

pp.239-241

註 15　Aristoteles、*De Gen. Animal.*、E8. 789 b2

Cicero、*de fato.*、17, 39

註 16 バルテスの論じた人間の発達に影響を与える三要因、1.年齢段階的（成熟度や生活年齢）影響力 2.歴史段階的（世代的）影響力 3.個人的出来事（非標準的）の影響力、に応じた変容が前者であり、それに対して後者は、鈴木が述べる「何らかのクライシス」を想定した。

P.B.Baltes et al. ; Life-span Developmental Psychology、*Annual Review of Psychology*、31、1980、pp.65-110

鈴木乙史；性格形成と変化の心理学、ブレーン出版、1998、pp.147-148

[引用文献]

1）D.L. IX, 45.

2）Aristoteles、*De Anima*、A2. 405 a 5-7

cf. Aëtius、IV 3,5（DK 68 A102.）

3）Aristoteles、*ibid*、A2. 405 a 9-12

The ‘Cheerfulness’ as the Ethical and Moral Purpose
- On the ‘Education’ and the Personality Change -

Jun GOTO　Takao YOSHIMURA

It seems until now to us that the cheerfulness is one of the moral values. The purposes of this article are,

1) to consider ‘πόνος (the toil)’ as the way to ‘εὐθυμίη (the cheerfulness)’ after confirming the human goodness proposed by Democrit in his extant fragments
2) to argue the meaning of εὐθυμίη itself
3) to discuss the possibility of applying Democrit’s εὐθυμίη to our education as one of the methods of personal change.

Concerning to 1), based on Democrit’s frr. 211, 294, etc. πόνος plays the useful and important role in education so as to direct human nature from everyday affairs to the morality. But it works well on condition that the following requirements are satisfied, (i) it is given by the elders who have ‘σωφροσύνη (the soundness of mind), (ii) it is both successive and positive.

To 2), based on frr. 191, 40, etc. Democrit’s εὐθυμίη is somewhat different from our sense of that word. Its nuance is almost the same as μέτρον (the measure). We get it when we do keep the measure of judgment by following our σωφροσύνη. In this usage, his εὐθυμίη seems to be calm. But it still remained to discuss whether we can treat human intentional orientation in Democrit’s atomic scheme.

To 3). Psychology says the personal change is done both by the intentional and the accidental deeds. Considering to the application of Democrit’s εὐθυμίη to education, the consciousness and moderation is indispensable to both who teaches and who is educated.